

白百合女子大学英文科卒業後、中学の英語教師となる。

## 「"意"を優先した自分発の英語劇」

公営・民営を問わず、高齢者の施設（デイサービスセンター）に集う人々の表情に満たされぬ雰囲気は漂うのは、何故か？と、私は以前から疑問を抱いていた。いずれの施設も、「より安全で至れり尽くせり」を、モットーとしていた。一見正論だが、実はここに問題があった。

A施設（公）では、一方的にその日のスケジュールが決められ、例えば、「〇〇時～〇〇時まで「絵手紙」。」必要な道具一切が用意され、手本通りの指導で個性的な創作、俗に言う遊び心など皆無、これでは楽しむより、息苦しい。

「コーラス」にしても又しかり、決められた歌の歌詞が配られ、中央に立つ指揮者に圧倒されて声も出ない。果たして、与えられる事のみが、高齢者にとって幸せなのであろうか。

だがB施設（民）との出会いで私の疑問が解けた。そこでは「"意"を最優先とした自分発」をモットーとしていた。

今日は何がやりたいのかを、一つだけ選んで、用紙に書き黒板に貼る。

その一、「何もしたくない」と単純明快。誰にでもそんな日がある。休んでもらう。

その二、「英語劇」

実はこの協力者として、私が呼び出された。敬老の日に「シンデレラ」を上演との目標に向い、配役も彼等が、人気の王子役は老いても男性。迫力あるジャンケンで、シンデレラは推薦でそれなりの女性を選び、猛練習が続いたが、全員による達成感の万歳と観客の大拍手で幕が降りるまで、自分発やりたい人達の集りだっ

たが故に、一人の落伍者を出す事もなかった。

残念ながら高齢者による「英語劇」は、老人枠を超えた異色の感が否めない。しかし振り返った時、幾多のプラス面があり、俗に言う「やってよかった」を紹介したい。

先ず彼等の「やってみたい」との意志（挑戦力・好奇心）に、私は感動した。

そしてグループで物事を成すには、個人が責任を果たす事が大事で、健康に気をつけ（早寝早起き）、欠席者が少なくなった。台詞を覚える事で、脳を活性化させ、発声練習により、口を大きく開き大声で、はっきりと話すようになり、抑えていた自分の意見を発表できるまでに到達した。舞台上で、猫背でガニマタの王子ではサマにならない。他の人々も参加してのトレーニングでは、姿勢が良くなり、杖が不必要になった人も出るハプニングも起こった。女性では、他人に見られる事を意識して、心身共に気を配り、より美しくなった。

忘れてはならないのが、彼等の家族の支援と協力であった。家族の話を経験すると、「英語劇を始めてから、（高齢者の）グチが減った。」「息子や孫に英語の発音を教えてもらい対話が増し、家族（世代）の断絶が無くなった。」「私（嫁）が、姑の舞台衣装（ロングドレス）を、作って以来、悪口が嫁自慢に変わり、嫁姑戦争が終結した。」「プリンス ハズ カム！」英語の寝言を聞いたに至っては、少々涙ぐましい。

最後に、この種の“自分発”高齢者による英語劇といっても、まだ発音、演技共々未熟だが、やがてシェークスピアの作品を、堂々と演じ、世界各国での公演を実現し、平和的な文化外交に貢献する、そんなとてつもない夢を「英語劇」は、私に抱かせてくれた。